

お月見

旧暦の八月十五日を「十五夜」「中秋ちゅうしゅう（仲秋）の名月」と言い、日本では古くよりお月見をする風習があります。後者の「中秋の名月」というのは、秋の真中に出る満月の意味で、旧暦では一月く三月を春、四月く六月を夏、七月く九月を秋、十月く十二月を冬としていたことから、八月は秋のちょうど真中であり、八月十五日の夜に出る満月ということで、そのように呼ばれるようになりました。なお、現在用いられている新暦では一ヶ月程度のズレが生じるため、九月七日から十月八日の間に訪れる満月の日を十五夜、中秋（仲秋）の名月と呼んでいます。

十五夜は、満月を觀賞する他、これから始まる収穫期を前にして、収穫を感謝する祭としての意味合いがあります。九月頃に収穫される「芋」をお供えすることから「芋名月」とも呼ばれています。現在では、満月のように丸い月見団子と魔除けの力があるとされたススキを供えるのが一般的です。また、地方によってはこの日だけは、他人の畑の作物を無断で取っても良いとか、子どもがお月見のお供え物を盗んで良いとする風習もあります。

長崎県五島ごとうの一部では「まんだかな」（お供えが済むとすぐ子どもがそれを取って行ってしまふ）という風習や、秋田県仙北郡せんほくぐんでは「片足御免」（他人の敷地に片足を踏み込んで取るぐらいなら公認）という風習があります。これは、この日だけは「お月様が持つて行って下さった」と言うことのでめでたいからだそうです。

このお月見の風習は、八月十五日だけでなく九月十三日にも行われます。こちらは「十三夜」と言います。また、中秋の名月の後なので、「後の月」と言われたり、お供えとして栗や枝豆等を供えることから「豆名月」「栗名月」とも呼ばれています。各地では十五夜をしたなら、必ず十三夜もしなければいけないと言われており、片方だけの月見を嫌う風習があったようです。また十五夜とは違い、十三夜のお月見の風習は、中国や朝鮮半島には見られず、日本独特の風習です。

ところで、月はその模様（海と呼ばれる平原の部分）から「月にはうさぎが住んでいて、餅つきをしている」という話が古くから伝えられています。日本以外に、他の国では月の模様に関してどのような見方があるのでしょうか。まず隣国の韓国においては、日本同様「うさぎの餅つき」と考えられています。次にアメリカでは「女性の横顔」とされており、さらにインドでは「ワニ」ヨーロッパでは、「木につながれたロバ」や「キャベツ畑の泥棒」「片手だけしかないカニ」「かぼちゃを食べる男」「本を読む人（ローマ神話）」等々とその国の自然、習慣、伝統などが関係して各国によって様々な見え方があります。

平安時代、貴族の間ではお月見の際、観月の宴や舟遊び（舟に乗ったりして水面に揺れる月を楽しむ）など、歌を詠んだり、お酒を飲んだり、月の美しさを堪能しました。しかし今では、街中では高層ビル等が立ち並び、一等星でさえ見えない程のネオン等により、なかなか月の美しさを味わうことが出来ません。今年の「お月見」は、街中を少し離れてみて月をじっと眺めて想像を働かせてみては如何でしょうか。新しい月の模様を発見出来るかも知れません。

【参考資料】

「現代こよみ読み解き事典」 岡田芳朗・阿久根末忠 編 柏書房

「日本人のしきたり」飯倉晴武 青春出版社

異なる文化を楽しむながら学ぶ事典 <http://www.netlaputa.ne.jp>